

令和6年度医学部医学科卒業証書・学位記授与式を執り行いました

令和7年3月25日(火)、長崎大学医学部記念講堂にて、令和6年度医学部医学科卒業証書・学位記授与式が執り行われ、118名の卒業生が新たな門出を迎えるました。

池松和哉医学部長からは、卒業生へ教員からの最後のメッセージとして「医師としての第一歩を踏み出すにあたり、「倫理観を持つこと」と「理性を磨き続けること」そしてその基本となる「広い教養を持つこと」を大切にしてほしい。皆さんにこれから進む道が、多くの人々に希望を与えるものとなることを心から願っています。」とはなむけの言葉が送られました。

また、卒業生代表の林 和範さんは、「コロナ禍という困難の中で医師を志し努力した6年間を支えていただいた先生方や家族に感謝し、これからも研鑽を続け医師としての道を邁進していきたい。」と答辞を述べました。

さらに、ポンペ賞(学業優秀者)を林さん、尾崎さん、天本さんの3名、ポンペスポート賞(競技会で優秀な成績を挙げた者)を西村さん、ポンペ国際学術賞(国際的な学術活動を行い、その貢献度が高く評価される者)を川崎さんがそれぞれ受賞されました。

長崎大学医学部医学科は、医療人になるための一歩を踏み出された卒業生の皆様の門出をお祝いし、今後のご活躍とご健勝を心より祈念いたします。



答辞

暖かさを増す毎日に春の到来を感じ、人々は喜びに胸を膨らませ、各地で桜の蕾も膨らみ始める季節となりました。

本日は、私たち卒業生のためにこのような素晴らしい式典を挙行していただき、誠にありがとうございます。医学部長をはじめ、ご多忙の中ご臨席賜りました先生方、ならびに来賓の皆さん、そして式典を挙行するにあたりご尽力いただいた大学関係者の方々に、卒業生一同心よりお礼申し上げます。

1945年8月9日11時02分、高度9600mの上空から投下されたプルトニウム爆弾は松山町141番地のテニスコートの上空で炸裂しました。無慈悲な眩い光線と続く轟音は、命、と希望さえも一瞬にして奪い去りました。

県外出身の私にとって、原爆投下は終戦間近の歴史の一幕でした。ところが、「長崎で育ったみんなは、投下時刻を分単位で知っている」という事実が重く私の胸を打つこととなりました。長崎の平和への思いは終戦後も連綿と受け継がれ、みんなの心に深く根付いているのだと実感しました。そうした意識は6年前の私に平和の種を蒔き、こうして今、芽吹き始めています。着実に復興を遂げた長崎の地で、平和公園に佇む平和祈念像に見守られながら、6年間の学びを終えることができました。そして戦後80年の節目の年に卒業を迎えようとしております。

本日の祝福に満ちた卒業式も決して当たり前でないことを私たちは知っています。入学とともに医学の森に足を踏み入れ、その広さに心を奪われたのも束のことでした。2020年初頭、世界を揺るがす感染症によって、当たり前の毎日は私たちの前から忽然と姿を消したのです。未曾有の事態に世界中の誰しもが恐怖に慄きました。外出を制限し閉め切ったはずの部屋ですら、世界中に渦巻く不安と混乱の侵入を拒むことは叶わなかったのです。広大な医学の森で嵐に見舞われた私たちは、数ヶ月の間立ち往生する他ありませんでした。

八方塞がりにも思える日々でしたが、オンライン講義開始の一報が入りました。大学関係者の皆様のご尽力により、また歩みを進めることを許されたのです。オンライン講義の実施に当たり、柔軟に対応してくださった先生方への感謝を欠くことはできません。先生方は、コロナ禍であっても力強い歩みで私たちを導いてくださいました。

厳しい制限のもとで、敢行された解剖実習のことを片時も忘れることはできません。交代制のため十分な実習時間を確保できないなか、解剖実習の実施を許可いただきました。御献体の尊い遺志を決して無駄にはしまいと固く誓って実習に臨みました。御献体の皆様は解剖を通じて私たちに語りかけ、他のどの教科書より詳細で明快に、そして丁寧に指南してくださいました。解剖実習の初日に教授から賜った「目の前の御献体は皆さんが診る初めての患者さんです」という言葉をあらためて噛み締めています。遠く特別な存在にさえ感じられた医師の世界への第一歩を踏みだせたように感じました。

一時は猛威を振るったCOVID-19も、時が流れるにつれ勢いを失い、今ではすっかりなりを潜めています。空前絶後の病さえ、諸行無常の響きあり、ということでしょうか。しかし、医学生の立場からパンデミックを見守った私たちは、ただなりゆきのままに安寧が得られたとは到底考えられません。危険と隣あわせの現場で治療にあたった医療者の方々、治療薬とワクチンの一刻も早い開発を目指した研究者の方々、その他あらゆる形で感染症に携わった方々、最後に、終息

の日を信じ徹頭徹尾、予防を欠かさなかった世界中の皆さん、全員の存在あってこそでしょう。爪の先から想いの端まで、全身全霊をささげた闘いが今日を実現したはずだと確信しています。

新しい生活様式が浸透しつつあるころ、私たちは白衣を授与され、初めて白衣に袖を通しました。白衣の重さに医師という職業の責任を重ねたことが、まるで昨日のことのように思い出されます。ポストコロナの病棟で、私たち118人は118人分の実習を経験しました。ある人は大学病院で先端医療に触れる一方、ある人は離島で地域医療の必要性を学びました。中には、日本を飛び出して海外での実習に臨んだ者さえいます。歩んだ道は違えど、全員が患者さんと向き合ったび着実に成長したことには疑いの余地はありません。白衣と決意を胸にそれぞれの道を進んだ118人が再び一堂に会し、卒業という門出を迎えることができました。

振り返ってみると、感染症の脅威が私たちの生活に与えた影響は計り知れません。そんな困難にも関わらず、6年もの間、私たちが医師を志す手助けをしてくださった皆様に重ねてお礼申し上げます。

古代ギリシアの哲学者ソクラテスが問答法を用いて「無知の知」を説いて回ったことはあまり有名です。私は医学を通じ、まさに「無知の知」を実感しました。講義や書籍を通じて学んだつもりであっても、臨床実習でそれらの知恵を応用するには、一層深い理解を要します。患者さんは必ずしも教科書と合致せず、知識の吟味が必要でした。その過程で「なぜか?」を問い合わせ、無知であったことを知りました。先にも述べた通り、医学の森は広く、そのすそ野を見通すことは到底できません。自身の知るところがわずかであることを、常に心に留めたいと思います。そして決して無知であることを悲観せず、研鑽のための情熱へと昇華させることに努めます。

医学の知識はまだまだ発展途上である一方、こと医療倫理についてはじっくりと涵養いただけたと自負しております。私たちの学んだ長崎大学医学部は「医師は病める人のものである」と言う、ポンペ先生の言葉を基本理念としています。今日この言葉を聞いた私たちの頭に浮かぶ医師の姿は、入学式の時とは比べものにならないほど、鮮明で洗練されたものです。ポンペの言葉を胸に刻み、長崎大学医学部医学科卒業の名に恥じぬよう、常に高い倫理観をもって患者さんへ接することを心がけます。

医師という職業を選んだ以上、人の生死からは目を背けることはできません。ときには責任の重さに押しつぶされそうになることもあるでしょう。そういうときでも、6年間で得た仲間たちの力も借りながら腐らず頑張り通したいと思います。どうしても先生方の手助けが必要となることがあるかと存じます。その際は、技術的な面に限らず精神的な面でも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。

最後になりますが、長崎大学の皆様、そして長い間そばで見守り、支え続けてくれた家族に感謝いたします。日本初のベッドサイドでの医学教育という、比類なき歴史を有した場所で学べたことを誇りに思い、それぞれの道へ邁進してまいります。長崎大学のさらなる発展と皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げ、答辞とさせていただきます。

令和7年3月25日

令和6年度 長崎大学医学部医学科
卒業生代表 林 和範